

## 平成 27 年度 高槻中学・高等学校 学校評価

### 1 めざす学校像

#### ■めざす学校像

次代を担う人物を確かに育成する最優の進学校を目指す

#### ■教育方針

確かな学力・豊かな人間性・健やかな心身の育成と、変化する社会に積極的に対応し得る能力・意欲・創造性を養う

### 2 中期的目標

【中期的目標】、【課題を踏まえた実践計画】

#### ①SSH(スーパーサイエンスハイスクール)、SGH(スーパーグローバルハイスクール)アソシエイトとしての教育活動およびコース制の充実

指定2年目のSSH(スーパーサイエンスハイスクール)は「先端学力知とグローバルマインドセットを備えた生命科学系リーダーの育成」を、今年度指定されたSGH(スーパーグローバルハイスクール)アソシエイトは「国際的な課題への取り組みを通して、グローバルヘルス向上を目指す次世代リーダーの育成」を目指し、より高度で質の高い教育活動の展開を図る。また、コース制は導入2年目となり、高1・高2が、GS(グローバルサイエンス)、GA(グローバルアドバンスト)、GL(グローバルリーダー)のカリキュラムに則った学修を進めている。今後はよりコースの特性に応じた教育プログラムの充実を図っていく。さらに、現中1・中2は中3進級時に、現中3は高校進学時にコースが分かれることから、生徒にとっては、より早い段階から目的意識をもって学習に取り組むこと、明確な進路意識を持つことが求められるため、それに対応した指導とガイダンスを充実させる。

#### ②School Mission「Developing Future Leaders With A Global Mindset」の実現を図る教育活動の展開

本校のミッション実現に向け、卓越した語学力や国際的な視野を持って、世界を舞台に活躍できる次世代のリーダーを育成するための教育活動をより充実させる。

#### ③高大連携の教育プログラムの充実

本校は昨年度、大阪医科大学との法人合併、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定という二つの大きな節目を迎え、高大連携の教育活動を推進してきた。今年度はSGH(スーパーグローバルハイスクール)アソシエイトの指定も受け、より多様で質の高い高大連携の教育プログラムの充実を図っていく。

#### ④「探求型」学習の充実と学力の三要素の育成

本校は3年前から特色教育の一展開として「探求型」学習に取り組んでいる。思考力を重視した問題解決的な学びは、中教審の答申やそれを踏まえた2020年の大学入試改革においてもキーワードとなっている。そこでは、新しい時代に求められる学力の三要素として [知識・技能]、[思考力・判断力・表現力]、[主体性・多様性・協働性] が挙げられている。自己評価では、環境・経済・情報・医療・福祉などの現代的な課題やグローバルイシュー(地球規模での解決が必要な問題-健康・環境・貧困など)を扱った教育活動が行われているという項目の評価が大きく改善されたが(H24年度44%→H25年度56%→H26年度72%)、より高次での充実を図りたい。また、思考力を重視した問題解決的な学習を行っているという項目の自己評価も高くなってきたが(H24年度70%→H25年度72%→H26年度77%)と十分とは言えない。各教科で、知識の習得(インプット)だけでなく、考察と仮説の構築、その検証を繰り返す体系的な学びを促し、それを運用(アウトプット)する力を体得させるような学習を、本校の教育活動全体を通じて積極的に取り入れていく。また、幅広い学びの成果や活動を記録する学修ポートフォリオ『My Career Notebook』を活用し、生徒自身が振り返りや学習計画の改善、キャリアデザインできるよう指導していく。さらに、2020年に大学入試を迎える中学1年生は年度末に学修インタビューを行い、生徒自身が教育活動全般を振り返って考察しプレゼンテーションすることにより、主体的に学ぶ力や意欲の伸長を図っていく。

#### ⑤高い学力が確かに身につく指導とベンチマーク達成のための成果の検証

本校は2017年までに到達すべき進学および学習到達度の数値目標として下記のベンチマークを掲げている。これを達成するため、進学実績の飛躍的な向上を図るため、各学年が年間計画で取り組む学力向上のための取り組みの実施状況とその成果について、節目節目で検証を行い、学校全体として実効性のある改善策を実施する。また、基礎・基本を徹底し、十分な理解度や到達度をもった上で、知識活用型の発展的な学習に取り組めるよう、特に中学段階における学習指導を徹底する。さらに、生徒の潜在能力を発揮させ、学力を十分に伸ばせるよう全校をあげて学力向上に関する具体的な取り組みを実践していく。

【ベンチマーク】2017年度迄に一(A)難関国立10大学 合格者130名 (B)国公立医学部+大阪医大 合格者40名 (C)中学卒業時の英語力 50%が英検2級

#### ⑥新校舎建設計画および将来構想

自己評価では、十分な教育を行うための施設・設備が整っているという項目の評価が依然として低かった(項目38が34%)。今年度より、新校舎建設の準備を本格的にスタートし、さわらぎキャンパス全体の中長期的なレイアウトを視野に入れつつ、諸施設の整備と刷新を図るべく基本計画を固めていく。

#### ⑦徳育教育の充実

自己評価では、生徒が生命を大切に思う気持ちや社会のルールを身につけることができるよう、年間指導計画に基づき道徳教育を継続的に行っているという項目の評価が改善されつつあるが、十分とは言えなかった(H24年度51%→H25年度55%→H26年度62%)。また、生徒(高校生)の評価では、学校は社会のルールや社会性を身につけるような指導を十分に行っているという項目の評価が依然として十分ではなかった(H26年度64%)。今年度も引き続き、服装、挨拶、清掃活動など生活の基本を大切に指導を徹底しながら、徳育教育の充実を図っていききたい。清掃活動が行き届いているという項目の評価は上昇傾向にあるが(H24年度47%→H25年度35%→H26年度49%)、まだ不十分であるので今後とも改善を図っていききたい。平和学習を目的とした中学修学旅行、ボランティア活動の奨励、道徳教育の充実、人権教育の推進等とともに、学校の様々な教育活動を通して、心豊かな人間を育成していききたい。

#### ⑧社会貢献活動としてのボランティアの推進

今年度よりボランティア活動支援センターを校務分掌の中に位置づけ、ボランティア活動をより推進していく。本校のミッション実現のため、多様で豊かな人間関係にふれる体験を教育活動の中に位置づけ、リーダーが持つべき他者を思いやる心、奉仕の心、課題解決力を育みたい。社会貢献活動を中心に行うボランティア委員会と、生徒募集イベントにおいてボランティア活動を行っている「T-BEST」の活動が、世界や人類の福祉に貢献できる人物の育成に繋がることを期待している。

#### ⑨指導力および資質の向上を図る教員研修の実施

自己評価では、学校内で他の教員の授業を見学する機会がよくあるという項目については年々改善が見られる(H24年度59%→H25年度65%→H26年度70%)が、校内研修は教育実践に役立つような内容になっているという項目の評価は大きく下落した(H24年度62%→H25年度57%→H26年度37%)。今後は研修内容を吟味し、教科指導や教育的課題についての学校内外での研修をより充実させ、日常的なOJTの活性化を図っていききたい。また、今年度は全教員を対象としてアクティブラーニングに関する研修を実施し、新しい教育に対応できる実践力を高めていききたい。

## ⑩ ICT活用教育の推進

今後ますます進化を遂げるであろう高度情報化社会を生き抜くために必要なICTスキルを養うため、メディアリテラシーを含めたICT教育を充実させていく。

## 【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 27 年実施分]	学校協議会からの意見
<p>【総論】</p> <p>〔保護者〕</p> <p>全般的に高い評価をいただいている。特に、進路講演会など進路に関する適切な情報提供を行っている、子供に関するプライバシーが守られているといった項目で90%以上、学校の雰囲気がよく生徒たちが生き生きとしている、先生は子供の能力や努力を適切・公平に評価している、いじめや暴力のない学校作りに取り組んでいるといった項目で85%以上の保護者の方から肯定的評価を得た。継続して保護者のご理解を得ながら教育活動を充実させるよう努めていきたい。一方、学習の内容や進度などを懇談や学年通信やシラバスなどによってよく知ることができるという項目の評価が69%(高校保護者)と低かったため、次年度はシラバスの改訂と中2での学修インタビュー実施によって改善したい。</p> <p>〔生徒〕</p> <p>本校での生活が自分の将来にとって役に立つ、学校生活が充実しているといった項目の評価が高く、本校生の充実した学校生活とそれに対する満足度の高さがうかがえる。また、学校は授業と補習や講習などで進路実現に必要な学力の充実と伸長を図るよう努めている、進路についての情報をよく知らせてくれる、授業の進度や内容は適切であるという項目の評価も高いことから、進路指導や学習指導面でも満足度が高いことがうかがえる。一方、校長は自らの教育理念を明らかにして教育活動の充実・学校運営の改善を図っている、生活指導の方針に共感できる、生徒の話聞く機会や心身の悩みに対する対応といった項目の評価が低くなっているため、理念や方針を生徒に伝えて理解を得るようにするとともに、より親身になって教育にあたるようにしたい。また、社会のルールや社会性が身につくように指導を十分に行っているという項目については中学と高校では評価が対照的になっていたため、高校での指導について改善を図りたい。</p> <p>〔教員〕</p> <p>近年進めている学校改革により、教育内容の充実・改善に関する項目、組織的な指導体制の構築に関する項目の評価が高くなっている。一方、校務運営や校内研修、清掃活動、クラブ活動の活性化に関しては不十分だと言えるので改善を図りたい。</p> <p>一まとめ</p> <p>今後も継続して、個々の取り組みをPDCAサイクルに載せて検証し、よりよい方向に教育改革を進めていきたい。早急に解決できる課題については、すでに改善に向けた取り組みを始めているが、本校がますます発展し、生徒・保護者・教職員から高く評価されるためには、学校としての理念や指導の方針をより明確にし、教職員が一致団結して協働していくことが必要である。</p>	<p>[自己診断結果に対する評価及び意見]</p> <p>■将来を見据えて、先手先手で様々な手を打ち、大局的な立場から学校改革に取り組まれている校長先生はじめ幹部の先生方の真摯な姿勢に、大多数の保護者は、心より感謝しています。</p> <p>■大阪ナンバーワンの進学実績、日本一のSSH・SGH 教育実践校 という高い目標を掲げ、大学受験の結果と、本来の学問たる「探求型」学習という、一見、相反する二兎を同時に追求されるという、崇高なる学校方針は、生徒達の将来にとって、非常に有益なことであり、保護者会としても、全面的に協力して参りたいと考えております。自宅学習時間の増加は教師と家庭が協力して生徒を導かねば得られないものであり、スローガンとして、全家庭が団結して取り組むべき、最も重要な事案であると考えております。今後は、学校と保護者会が協力して、更に強力なる生徒への指導が望まれます。</p> <p>■学校評価アンケートに関して</p> <p>(1) 保護者アンケートの殆どの項目が80%・90%を超える数字となっていること自体、保護者の満足度が高いことのあらわれと判断でき、当校の伝統に裏打ちされた良さと、将来を見据えた学校改革への、保護者の高い評価と判断しております。全般としては、素晴らしいアンケート結果と捉まえています。</p> <p>(2) そんな中であって、今現在、多くの保護者が共有する、且つ、最も大きな問題点として、高校・保護者アンケート 25 の数字に反映されているのが、「学習環境面における学校の施設・設備」の評価の著しい低さです。即ち、新校舎建て替えに伴う騒音、及びそのことに付随する教室内の温度管理、通気性の問題です。多くの良識ある生徒・保護者は次代の為の新校舎建設のために、ある程度の犠牲は仕方ないと許容していますが、【受験を控える高3・高2生に対する配慮、防音工事等の迅速な実行】【これらの対応策を当該生徒に早めにアナウンスし、不満をためない等の工夫】等々、まだ工夫する余地はあると考える保護者が過半であることへの早期対応をお願いしたいと考えます。保護者会本部への要望が、最も多い事項であり、早急な対応を切にお願いします。</p> <p>(3) 食堂の改善（設備、味、サービスの両面）を、保護者会の意見を酌んで頂き、実施頂いたことを感謝しております。同時に要望しておりました、昼食時の混雑緩和の為の対応も今後お願いしたいと考えます。</p> <p>(4) 数年前より改善要望のでている「校庭の人工芝化」に関して、私立の競合校では、全面人工芝の学校が非常に多く、今の時代、必須なことと考えますので、早期の実施を検討願います。</p> <p>(5) 保護者アンケート 2 及び 28 に関連して、保護者からの要望として、当校の三者面談の少なさ、を改善して欲しい、という声が多いです。学校によっては、年 3～6 回実施している学校も多く、反抗期の男の子を抱える保護者としては、進学実績を上げる為にも、是非、検討願います。</p> <p>(6) 3 年前に保護者会として要望していた「宿題を最後までやりきらせる仕組みを強化して欲しい」という声に対して、改善を実行して頂きつつあることは感謝しております。「大阪ナンバーワンの進学実績」という当校の目標達成のためにも、更に、全ての教師が、強力に取り組んで頂けましたことを願っております。</p> <p>(7) 折角の素晴らしいセルフマネジメントプランナーにも関わらず、全然活用してない生徒もいるとの声もあり、チェックする担任によっては、注力度にかなり差があるのではと危惧しています。ある程度の強制も視野に入れるべきかもしれません。</p> <p>■まとめ</p> <p>大阪医大、大阪薬科大との法人合併を好機と捉え、医科学に強みのある、強い特色と存在価値のある中高一貫校として、真に、日本一の学校になれるチャンスのある素晴らしい学校であることを誇りに思い、先見性と強いリーダーシップのある校長先生はじめ幹部の先生方に心より感謝するとともに、保護者会として、これらかも、結果をだせるべく、全面的に協力して参りたいと考えます。</p> <p>一人でも多くの生徒達が、大学生、社会人になった時にも、一生懸命努力し続けられる立派な人間になれるよう、保護者会としてもサポートして参ります。</p>

## 3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
①SSH、SGHの教育活動およびコース制の充実	(1) SSHの教育活動の充実 (2) SGHに準じた教育活動の充実 (3) コース制に伴う教育活動の充実 (4) 中学の教育内容の充実と進路意識の向上 (5) コース選択に関するガイダンスの実施	(1) 課題研究やその成果の発表、SSセミナー、サイエンスキャンプ、科学技術コンテストへの参加 (2) 課題研究やその成果の発表、グローバルセミナー、Stanford 大学オンラインコース、海外フィールドワーク(パラオ) (3) 探究活動の充実、コース別研修の企画 (4) ア. 基礎基本の修得と定着の徹底 イ. キャリアデザイン進路講演会「ようこそ先輩」(中1、中2)、選択式進路講演会(中3) (5) ア. コース説明会(生徒対象、保護者対象) イ. 中学の保護者対象学年集会において説明	(1・2) 各教育プログラムの実施後の生徒アンケート (3) 高1、高2生の項目2、項目4がそれぞれ80% (H26年度項目2が78%、項目4が72%) (4) ア. 中学生の項目4の肯定的評価が85% (H26年度81%) イ. 中学生の項目21の肯定的評価が65% (H26年度58%) (5) ア. 中2・中3で各1回 イ. 中学保護者の項目1の肯定的評価が90% (H26年度89%)	(1・2) SSHでは科学技術、理科、数学に関する能力の向上に役立つという感想が、SGHでは途上国で現地の人と交流できたことが非常に良い経験となった、英語はツールであるということを再認識した、新たな問題意識を得たので大学では国際関係について学びたいという感想が多く見られた。 (3) 高1生の項目2が80%、項目4が72%、高2生の項目2が75%、項目4が67%だった。課題研究・探求活動は一定の成果をあげているが、今後もさらなる充実を図る。(△) (4) ア. 中学生の項目4が84%と上昇した。基礎基本の習得と定着の徹底を図る。(△) イ. 項目21は65%と上昇した。今後も充実したキャリア教育を展開していく。(○) (5) ア. 中2・中3でガイダンスを実施した。 イ. 肯定的評価は89%とほぼ目標値であった。保護者との協力関係のもと教育活動を進めるため、教育内容の変化などについて、今後はよりわかりやすく伝える工夫をする。(△)
②School Missionの実現を図る教育活動の展開	「Global Mindset」を持った次世代のリーダーを養うための教育活動の実施	ア. 次世代リーダー養成プログラム(英国研修、米国研修)の実施とプログラムの充実 イ. ターム留学(カナダ・プリティッシュコロンビア州に12月末～3月上旬まで留学) ウ. 特色教育としての英語教育の充実、使える英語を身につけるための英会話の授業、 エ. TOEFL / IELTS セミナー (GAコース) オ. 言語活動の充実 カ. International Young Leaders Advancement Programme (GAコース) キ. コミュニケーション研修(中1) ク. グローバルセミナー ケ. 台湾研修(GAコース) コ. 海外の中等教育学校(延平高級中学:台湾)との提携と交流行事 サ. 海外サイエンスキャンプ(GSコース) シ. 海外フィールドワーク(GAコース) ス. GLコースのキャリア教育の企画 セ. 次代を担う人物に求められる資質の明確化	・各プログラムの実施 ・自己評価において項目23「海外に目を開くことや次世代の世界を担う人物の育成に役立つような取り組みが行われている」の肯定的評価が90% (H26年度85%)	・各プログラムにおいて充実したプログラムを行うことができた。とくに、英語教育については、4技能を養う授業や課外プログラムを実施し、海外の中等教育学校との連携、交流も継続して行うことができた。また、言語活動の充実を含め、アクティブラーニング推進のためのチームを立ち上げ、外部の専門家を招いて研修を実施した。次代を担う人物に求められる資質の明確化については、その資質について、プロジェクトチームを中心に議論をかさね、身につけたい「10の資質」としてまとめることができた。本校の教育活動の中で「10の資質」を確かに育成できるよう取り組んでいく。(○) ・項目23の肯定的評価が76%であった。国際教育担当者との教員との意識差を解消すべく、情報を共有する機会を増やし、ミッション実現に向け、教育活動に取り組んでいく。(×)
③高大連携の教育プログラムの充実	高大連携の教育プログラムの開発	ア. 大阪医科大学…SSH事業への支援、SGHアソシエイト事業への支援、医学部実習(メディカルサイエンストレーニング)、最先端医学教室 イ. 京都大学…SSH、SGHアソシエイトの活動における連携 ウ. 大阪大学…SSH、SGHアソシエイトの活動における連携、公開講座への参加(高2)、グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)との共同研究(GAコース) エ. 神戸大学国際文化学部とのSGHアソシエイトの活動における連携(GAコース) オ. 関西学院大学とのSGHアソシエイトの活動における連携(GAコース) カ. SSH事業における東京大学研究室との連携 キ. SSH事業での大学研究室訪問 ク. GAコースにおける海外大学との交流プログラム a) スタンフォード大学国際異文化教育プログラム b) ケンブリッジ大学学生とのリーダーシップ研修 c) 台湾研修における国立台湾大学、台北医学大学での研修	・各連携事業の実施 ・高1、高2生の項目23「学校の教育活動を通して多様な経験・体験ができていと思う」の肯定的評価が80%。 (H26年度73%)	・大阪医科大学との連携プログラムが、より充実したかたちで実施することができた。また、各大学との連携プログラム、課題研究の指導、放課後講座などにより、最先端の研究にふれることができた。SSH、SGHの取り組み計画にしたがって多彩なプログラムを展開した。GAコースにおいては、海外の大学との交流プログラムが本格的に始動し、生徒たちの発表やレポートから顕著な成果が得られた。(○) ・項目23の高1生の肯定的評価が67%、高2生の肯定的評価が69%であった。実施のプログラムが希望者対象だったこともあり、全体的に多様な経験や体験ができたという実感を得られなかったようである。コースや意識の高さにかかわらず、学校全体としてのカリキュラムを整理、構築していく必要があると思われる。(×)

<p>④「探求型」学習の充実と学力の三要素の育成</p>	<p>(1) 高校生の「探求型」学習の充実と中学生段階での素地作り (2) 学力の三要素の育成</p>	<p>ア. GSコースにおけるSS課題研究 イ. GAコースにおけるグローバル課題研究 ウ. GLコースにおける教養探求 エ. 中3総合学習で行う理科探求基礎 オ. 中学卒業論文 カ. 中1総合学習で行う学びのリテラシー キ. 中2総合学習で行う課題解決型学習 ク. 各教科における言語活動(プレゼンテーション、グループ発表、ディベート)の実施 ケ. 学修ポートフォリオ『My Career Notebook』の導入と記入指導 コ. 学修インタビュー(中1)</p>	<p>・各教育プログラムの実施 ・自己評価において項目22「現代的な課題やグローバル 이슈をあつかった教育活動が行われている」の肯定的評価が75%(H26年度72%)</p>	<p>・コース制導入2年目を迎え、各コースにおいて探求活動や課題研究をより充実して行うことができた。また、中学段階では、総合的な学習の時間において、基礎的なスキルや課題解決の方法、実験のプロセスの基礎を系統立てて学習するカリキュラムを開発し、探求活動の素地をつくる教育活動を実施した。さらに、学修インタビューの実施やポートフォリオの作成を通じて、生徒たちが見通しをもって学び、その到達度を評価するとともに、学力の三要素の育成を意識した教育活動を各教科の授業や行事との関連の中で実施した。(○) ・項目22の肯定的評価が59%と下降した。各教育プログラムの取り組みは増えているものの、その情報伝達に課題がある。今後は、個々の取り組みを学校全体で共有する機会を増やしていく。(×)</p>
<p>⑤高い学力が確かに身につく指導とベンチマーク達成のための成果の検証</p>	<p>2017年までにベンチマークを達成するための学習指導の実践【ベンチマーク】 (A) 難関国立10大学合格者130名 (B) 国公立医学部+大阪医大合格者40名 (C) 中学卒業時の英語力50%が英検2級</p>	<p>(1) ベンチマーク達成と進学実績の飛躍的な向上を図るための取り組み ア. 各学年が取り組む学力向上策 イ. 模試結果検討会議の実施(中学3学年×年2回) ウ. 各教科に京大担当者を2名以上おき、京大対策講座を開講する (2) 中学段階における学習指導の徹底 ア. セルフマネージメントプランナーを積極的に活用し学習習慣の向上を図る。 イ. 家庭学習時間2時間以上を徹底する。 (3) 進路指導部主導による学力向上 ア. 学習指導の担当者の設置 イ. 学年進路担当者による実効性ある改善策の実施 ウ. 模試結果のフィードバックと模試ノートを使った復習。模試における目標の明確化。 (4) オンライン教育の導入 (5) キャリア教育を充実させ進路意識を向上させる</p>	<p>(1) 各学年の学習到達度の状況と学力向上策の成果について、学期毎に検証する。 (2) 中学生の評価において「自学自習の態度や家庭学習が定着するように指導している」「学習意欲や進路意識が向上するような指導をしている」の肯定的評価がそれぞれ65%(H26年度項目19が61%、項目21が58%) 中学卒業時の英検2級合格率20% (3) 高校生の評価において項目21「学校は授業と補習や講習などで進路実現に必要な学力の充実と伸長を図るよう努めている」の肯定的評価が80%(H26年度75%) (4) 中3～高2で実施 (5) 中1、中2、高1で講演会を年1回実施</p>	<p>(1) 中学生においては学力向上のための取り組みが顕著にあらわれている。模試結果検討会議で目標に対する結果の検証を行い、その後の指導に活かす取り組みが図られた。高校生においては中だるみからの挽回に向け、京大担当のチームを編成し、入試問題分析の冊子を作成するなど、学年の枠を超えたチーム体制を構築中である。(○) (2) 項目19の肯定的評価が67%、項目21が65%と目標値に達した。また、中学3年の英検2級の合格率は23%(260人中62人)に達し、目標数値を上回った。(◎) (3) 項目21の肯定的評価が74%であった。生徒の声を真摯に受け止め、生徒の学力の充実と伸長のため、学年・教科で実効性のある取り組みを計画・実行していく。(×) (4) 中3から高2においてオンライン教育を導入し、実施することができた。今後は、より有効的な活用法を計画していく。(○) (5) 中1の7月、中2の12月、高1の11月にキャリア教育に資する講演会を実施した。多くの生徒にとって将来を考えるきっかけとなり、内容も充実していた。(○)</p>
<p>⑥新校舎建設計画および将来構想</p>	<p>新校舎建築計画の推進</p>	<p>新校舎建築の基本計画の策定と今後のさわらぎキャンパス整備構想</p>	<p>・自己評価において項目39「施設・設備の拡充は、長期的見通しに立ち計画されている」の肯定的評価が10%上昇。(H26年度59%)</p>	<p>・新校舎の設計および施設設備の充実を図る計画は順調に進んでおり、平成27年度中に計画通り高校校舎の着工に取りかかっているものの、項目39の肯定的評価は4%上昇(63%)にとどまった。今後は職員会議等で全体計画および進捗状況をより詳しく示していく。(△)</p>
<p>⑦徳育教育の充実</p>	<p>(1) 生活の基本を大切にしている指導の徹底 (2) 平和学習を目的とした修学旅行の実施 (3) 道徳教育の充実 (4) 人権教育の推進</p>	<p>(1) 生活の基本を大切にする指導の徹底 ア. 服装 ←「身だしなみ週間」の設定 イ. 挨拶 ウ. 清掃活動 (2) 平和学習を目的とした修学旅行(中3) (3) 中学3年間を通じた系統だった道徳教育 (4) 年間計画に基づく人権教育 ア. 每学期1回人権LHRの実施[各学年のテーマ] 中1: 他者を理解し、尊重する心を持つ。 中2: 心身に障害のある人達の人権を考える 中3: 戦争の歴史を通して、平和の大切さを学ぶ 高1: 民族問題、人種問題について理解を深める 高2: 日本および世界の民族問題 高3: 生徒の人生の身近な人権について学ぶ</p>	<p>(1) 生徒の評価において項目12「学校は社会のルールや社会性を身につけるような指導を十分に行っている」の肯定的評価が中学生・高校生ともに70%(H26年度中学72%、高校64%)。 自己評価において項目40「清掃活動が行き届いている」の肯定的評価が10%上昇(H26年度49%) (2) 系統だった平和学習の実施 (3)(4) 生徒の評価において項目27「学校は人権の大切さについて、十分に指導している」の肯定的評価が中学生・高校生ともに70%(H26年度中学73%、高校66%)。</p>	<p>(1) 項目12の肯定的評価が中学生77%、高校生61%であった。中学生への指導は一定の成果がみられたが、高校生については教員の指導が十分ではなく、今後は様々な場面で社会性を指導していく必要がある。また、項目40の肯定的評価が48%であった。学校の清掃活動について、根本的な改善策を立て、実行していく。(△) (2) 今年度も中学3年間の集大成として、平和学習を目的とした長崎方面への修学旅行を実施し、充実した研修を行うことができた。(○) (3)(4) 項目27の肯定的評価が、中学生75%、高校生63%であった。とくに上級学年に対して、人権LHRの取り組みを充実させるとともに、普段の生活の中で人権意識を向上させるような指導を計画的に行っていく。(△)</p>

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">◎ボランティアの推進</p>	<p>ボランティア活動を行うための体制作りと活動支援および活動内容の充実</p>	<p>(1) ボランティア活動支援センターの体制確立                  (2) ボランティア委員会(生徒の組織)の校外・校内における社会貢献活動                  ア. 日本青年赤十字との連携                  イ. 大阪医科大学との連携                  ウ. インターアクトとの連携(地域連携)                  エ. 防災プロジェクト                  オ. 校内・校外企画                  (3) 生徒募集イベントにおける「T-BEST」メンバーのボランティア活動</p>	<p>(1) 年度末報告                  (2) 50名による活動                  ア. 年16回                  イ. 年15時間                  ウ. 年5回                  エ. 年5回                  オ. 年5回                  (3) 計4回のイベントに40名が参加</p>	<p>(1) ボランティア活動支援センターの一年間の充実した活動が年度末報告会議で報告され、その取り組みを教職員全員が共有することができた。(○)                  (2) ボランティア委員会のメンバーが20名に達し、左記の社会貢献活動に積極的に取り組むことができた。とりわけ大阪医科大学ボランティアセンターとの連携、インターアクトの認証という新機軸を活動の中に取り入れ、活動の幅を広げることができた。(○)                  (3) 計4回のイベントにのべ100名以上の生徒が参加し、T-BESTの活動が計画された以上に実施することができた。イベント参加者の評価も上々であった。(◎)</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">◎指導力および資質の向上を図る教員研修の実施</p>	<p>教員の指導力および資質の向上</p>	<p>(1) 研究授業の実施(年2回)                  (2) 学びあい週間の活性化(授業見学とレポート提出の義務化)                  (3) 外部研修への参加の奨励(教職経験10年未満の教諭の外部研修への参加を義務化。研修の成果の共有を努力目標とする)                  (4) 英語科教育顧問による研修                  (5) 国語科教育顧問による研修                  (6) 教員向け人権研修会                  (7) いじめ防止教員研修会                  (8) アクティブラーニング研修(全教員+各教科の推進メンバーを対象としたワークショップ)                  (9) 5年経験者研修                  (10) 新人研修</p>	<p>(1~2) 自己評価において項目44「学校内で他の教員の授業を見学する機会がよくある」の肯定的評価が75%(H26年度70%)                  (3) 年1回                  (4) 年4回                  (5) 年3回                  (6) 年1回                  (7) 年1回                  (8) 全教員年1回+推進メンバー対象2回程度                  (9) 年間を通じて4項目実施                  (10) 年間を通じて全15回                  ・自己評価において項目43「校内研修は、教育実践に役立つような内容になっている」の肯定的評価が60%(H26年度37%)</p>	<p>(1)(2) 項目44の肯定的評価が70%と昨年並みにとどまった。学びあい週間の運用について、具体的改善策を計画し、実行する。(△)                  (3) 対象教諭はもちろんのこと、多くの教諭が積極的に外部研修へ参加したものの、研修の成果の共有は十分に行えず、その改善に向けた検討を進める。(△)                  (4~7) 各研修を計画通り実施し、資質の向上を図ることができた。(○)                  (8) アクティブラーニング研修を全体で1回、推進チームで1回実施した。また、外部研修にも多くの教員が参加した。次年度はアクティブラーニングの本格的な推進に努める。(○)                  (9)(10) 計画通り実施し、成果を得た。(9)については、対象教員全員が年度末に自身の学びの成果を発表した。(○)                  ・項目43の肯定的評価が45%と向上したものの、目標値には及ばなかった。これまで実施してきた取り組みを精査し、教育実践に役立つような内容の充実を図っていく。(×)</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">◎ICT活用教育の推進</p>	<p>ICT教育の本格的導入(平成28年度)に向けた準備</p>	<p>(1) ICT利活用教育推進委員会の設置                  (2) ICT利活用教育の先行事例の研究                  (3) ICT利活用教育の早期実施の準備                  ア. 校内環境の整備、システムの構築                  イ. メディアリテラシーを含めた教育体制の構築(何を使って、何をさせるか)                  ウ. 教員研修                  エ. 広報活動</p>	<p>平成28年度の新中1からICT教育を本格的に実施する                  (1) 5回の会議                  (2) 他校訪問・視察・研修会参加5回                  (3) ア、イ. 準備を確立する                  ウ. 年1回                  エ. 説明会でPRする</p>	<p>(1)(2) 予定の回数を実施することはできなかったが、ICT教育の本格的な実施に向け、計画的に準備を進めることができた。(△)                  (3) ア~エについて、ハード、ソフトの両面で事前シミュレーションを十分に行い、平成28年度よりiPadを中学1年生に持たせ、新しい教育活動の展開を図る準備ができた。今後はそのデバイスを用いて、何をどのように学ばせるか系統立てた指導の方法を検討していく。(◎)</p>